京都大学大学院文学研究科２１世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

規範性と多元性の歴史的諸相

Canone Newsletter

No.5

2004/10/22

Contents

■研究会および調査報告

□ ・何が論駁されたのか？
　－『テアイテトス』184b-187a における「知識＝感覚」定義の論駁について－
・カントの『純粋理性批判』における直観と感性
　－その結びつきの理論－

□ ・金刀比羅宮調査

■今後の活動予定

■研究会および調査報告

●研究会報告

※ＰａＳＴＡ研究会と共催

●開催日時

２００４年7月１６日（金）
午後２時００分～５時００分

●場所

京都大学文学部新館第七講義室

●発表題目および発表者

①何が論駁されたのか？
－『テアイテトス』184b-187a における「知識＝感覚」定義の論駁について－
中村健（古代哲学史Ｄ３）
②カントの『純粋理性批判』における直観と感性
－その結びつきの理論－
長田蔵人（近世哲学史 OD）

●概要

①「知識とは何か」を探究するプラトンの対話篇『テアイテトス』では、その問いに対する最初の返答として「知識とは感覚である」という定義が提案される。テアイテトスによるこの第一定義は、プロタゴラスによる相対主義テシス、また、ヘラクレイトスの流転説と複雑に結びついた形で提出される。したがって、テアイテトス、プロタゴラス、ヘラクレイトスのテシスがどのような相互関係にあるのかという問いは、『テアイテトス』第一部を解釈する上での中心的な論争点となっている。本稿は、このような論争を念頭におきつつ、「知識＝感覚」定義が最終的に直接論駁されている議論（最終的論駁）の意味を考察する。では、第一部後半の構造を簡単に確認しておこう。

ソクラテスの問題提起

ソクラテスは、あらゆる人の判断は（判断者本人にとって）正しいとするプロタゴラス説に対して様々な批判を行う一方で、「だが、それぞれの人が今現在持っている感覚は不可謬であり、その点においてテアイテトスの定義は正しいのではないか？」と問う。

ヘラクレイトス説（流転説）の論駁

万物の完全な流転は、言語の不可能性という不合理を導く。ここでひとまず、流転説だけでなく、それに基づくとされるテアイテトスの定義が論駁される。

「知識＝感覚」定義の論駁（最終的論駁）

テアイテトスの定義が改めて検討される。魂は個々の感覚を通じて固有の対象を把握する。我々は目を通じて色を、耳を通じて音を把握する。だが、目を通じて音を、耳を通じて色を把握することは出来ない。すると、その音と色の両方について何かを考えようとする場合、どちらか一方の感覚を通じてそれらを把握することは出来ない。ところで、音と色の両方について我々がまず第一に考えることは、それらが両方とも「ある」ということである。このような、諸感覚の対象をまたがる「共通のもの」(「あること」など）を、個々の感覚を通じては捉えることが出来ない。魂がこれら「共通のもの」を捉えることが出来るのは、個々

の感覚を通じてではなく、感覚を統合する魂自身によってである。ところで、感覚は「あること」に到達できない以上、真理には到達できない。また、真理に到達できない以上、知識にも到達できない。こうして、感覚は知識に到ることができず、「知識＝感覚」の定義は論駁される。

この「最終的論駁」の意味についてはこれまでに様々な解釈が提出されてきた。だが、それらの解釈は主にこの最終的論駁の箇所の詳細なテクスト分析に基づいたものであった。本稿はより広い文脈から、その直前で語られるヘラクレイトス説に対する応答としての、つまり、流転説により失われた世界の安定と言語の可能性を回復する試みとしての、「最終的論駁」の意義を考察する。

②カントの『純粋理性批判』において、「感性的直観」という言葉は自明の概念であるかのように用いられているが、しかし哲学史的に見るならば、カント以前には「直観」は必ずしも、「感覚」の能力である感性と直ちに結びつくような認識様態ではなかった。ではなぜ両者は結び付けられたのか。なぜ、感性の認識様態は単なる「感覚」であってはならないのか。本発表ではこのような問題意識のもとに、「直観」という概念に込められたカントの洞察を探ることによって、その感性との結びつきが決して自明の前提ではなく、「感性の弁護」(Apologie der Sinnlichkeit) というプログラムの内実を成す重要な成果であった、ということの解明が目指された。

この目的のために本発表では、単なる「感覚」にも見出される〈直接性〉や〈個体性〉という特徴だけによって「直観」概念を捉えようとする従来の解釈を見直し、直観の Totum 性、つまり〈部分に先行しそれを可能にする全体〉という性質に注目した。直観が Totum という本質のものとして感性に属するということは、悟性の認識様態が合成・総合であることと対を成し、この組み合わせの意義は、二つの異なる「量」概念の区別において明らかになる。すなわち、悟性の捉える「量」が常に部分の合成にもとづく非連続量であるのに対し、直観が捉えるのは、そのいかなる部分も最小ではありえないような連続量である。連続量とは、部分に先立つ全体を前提にしなければならず、この全体性を与えているのが、直観の Totum 性である。

次に、この Totum としての直観がカテゴリーと共に認識の可能性の制約を成すということから、無際限性、連続性、「汎通的合法則的連関」を本質とするカントの「自然」概念が帰結する。それは〈無際限に分割・合成の可能な規則的統一体〉であり、そして我々の認識対象である現象は、常にこのような統一体の部分としてのみ可能である。つまり現象は、現象として成り立つ限り常に、他に対する空間的・時間的関係、因果関係、相互作用によって結び付けられており、そのような規則的連関を捨象してしまうならば、我々に対する対象としては成り立ちえないことになる。

以上のことから、カントにおける直観が単に個体性の直接的把握そのものを意味するのではなく、部分としての現象を可能にする全体的連関の、その全体性を支える Totum として、対象の可能性の制約であることが理解される。そして合成・総合によ

っては捉えられないこのTotum性のゆえに、直観は感性に帰属するのである。こうして直観が帰されることによって感性は、ア・ポステリオリな単なる感覚の能力、つまり判明性において悟性に劣る能力としてみなされるのではなく、可能性の制約を求めるという超越論的探求の視点から、悟性に並ぶ認識のア・プリオリな能力として位置づけられることになる。ここに、『純粋理性批判』における「感性の弁護」が果たされる。

●調査報告

●主たる調査対象

金刀比羅宮金毘羅庶民信仰資料収蔵庫「冷泉為恭」関係資料

●日時

２００４年月９月２１日（火)、２２（水）

●調査場所

香川県琴平町　金刀比羅宮

香川県高松市　香川県歴史博物館・高松市美術館

●調査参加者

根立研介（本学、助教授）

宮崎もも（美学美術史学Ｄ２）

澤村斉美（美学美術史学Ｍ２）

筒井忠人（美学美術史学Ｍ１）

中尾優衣（美学美術史学Ｍ１）

●調査概要

今年、香川県の金刀比羅宮では、33年ぶりの大遷座祭が行われ、その記念事業として、9月17日から12月12日まで「金刀比羅宮のすべて」と題した展覧会が開催されている。伊藤若冲筆＜花丸図＞や岸岱筆＜群蝶図＞などの華麗な障壁画で飾られた奥書院を125年ぶりに一般公開するなど、金刀比羅宮に所蔵される貴重な文化財を境内六ヶ所で公開している。

この六ヶ所の展覧会場のうちの一つである金毘羅庶民信仰資料収蔵庫では、「冷泉為恭展」と題された展示が行われ、復古大和絵派の画家として知られる冷泉為恭（文政6－文久4）が金刀比羅宮のために描いた小襖絵＜琴棋書画図＞や天井画＜竜図＞などが公開されている。これらの作品は、安政6（1859）年関白九条尚忠が金刀比羅宮に餝車を奉納する際に、為恭がその奉行として下向し、金刀比羅宮に50日ほど滞在した折に描かれたものだという。その他、＜法然上人絵伝＞＜春日権現験記絵巻＞などの代表的な中世の絵巻物を為恭が模写した作品も多く展示されており、江戸時代後期の絵師における規範やその展開を考える上で興味深いものとなっている。江戸時代の大和絵においては、幕府や朝廷の庇護を受けた土佐派や住吉派が主要な位置を占めたが、江戸も後半になると、流派に伝わる粉本に拘泥し、形骸化に陥った土佐や住吉の流れから離れ、直接中世の秀逸な絵巻を模写することで大和絵を復興しようとする動きが現れる。為恭もこうした流れを受けて、中世の絵巻を中心に大和絵の模写に努め、その上で、新たな大和絵を創造しようと積極的な活動を行ったことが知られる。為恭の模写に対する真摯な姿勢は、この展覧会に展示された模写作品を見るだけでも明らか

で、例えば＜法然上人絵伝＞の模写においては、人物の表情や衣裳の文様も細かく再現している上、絵具の剥落までも丁寧に写している。また下描きとは若干異なる位置に訂正して描き直している箇所などもあり、構図を含め、できるだけ原本に忠実に模写しようとしている姿勢が窺える。このように、中世の絵巻物を規範として、それらの作品を数多く模写することで、大和絵の真髄をより深く学ぼうとする姿勢が、為恭の大きな特徴として挙げられる。そしてその成果は、為恭のオリジナルの作品＜琴棋書画図＞などを見ると明らかである。金地に濃彩、作り絵の技法で描かれた＜琴棋書画図＞には、色鮮やかな衣裳を纏った童子たちが琴・棋・書・画を嗜む様子が描かれているが、棋盤の形式や衣裳の文様には、繊細な注意が払われており、有職故実に基づきつつ工夫されている。また、豊麗で上品な人物描写などに、中世の絵巻を模範としながら、生気ある新たな大和絵を生み出そうとする為恭の積極的な姿勢が見て取れると言えよう。

なお、この他、香川県歴史博物館及び高松市美術館にも訪れ、展示資料を見学した。

（報告者　宮崎もも）

■今後の活動予定

１１月１３日（土）　日本カント協会第２９回学会
カント没後２００年記念学会

●場所　京都大学文学部新館第三講義室

●プログラム
「京都学派の伝統とカント」

・公開講演（10:00～12:00）
構成・可視化・アルゴリズム
― カント数学論のコンテキストと現代性 ―
出口康夫（京都大学・哲学）

「現代の宗教哲学」とフランスの kantisme
杉村靖彦（京都大学・宗教学）

・公開シンポジウム（13:00～16:00）
「京都学派の伝統とカント」
【提題】
西田幾多郎とカント　　岩城見一（京都大学・美学）
カントと田辺元　　嶺　秀樹（関西学院大学・哲学）
野田又夫先生とカント　　小林道夫（京都大学・哲学史）
【司会】　　福谷　茂（京都大学・哲学史）

・公開特別講演（16:00～17:00）
超越論的統覚とコギト　― アウグスティヌスの視点から ―
片柳榮一　（京都大学・キリスト教学）

・日本カント協会委員長挨拶（17:00～17:15）
量　義治　（日本カント協会委員長・ 埼玉大学名誉教授）

・懇親会（17:30～19:30）　　於：「カンフォーラ」（京都大学・本部キャンパス正門横）

※１１月１４日（日）には、カント協会主催の通常大会が引き続き開催されます。

１１月２７日（土）　研究会

●場所
京都大学文学部新館第五講義室　　１３時３０分～

●調査報告
金刀比羅宮調査報告
宮崎もも（美学美術史学Ｄ２）、筒井忠人（美学美術史学Ｍ１）

●研究発表
長安造像の規範性
萩原哉（善通寺宝物館学芸員）

「清水寺縁起絵巻」と足利義稙　－戦国期足利将軍の絵巻制作－
高岸輝（大和文華館学芸員）

■お知らせ

Canone ホームページをご訪問ください。ニューズ･レターでは紹介しきれない研究会や調査に関する情報を、随時更新しています。これからも、Canone をどうぞよろしくお願いいたします。

http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/canone/